

話し合い

吉野 ありがとうございます。もう全体をまとめていただいたような感じがいたしますけれども、司会の不手際で大変申し訳ないのですが、少し時間を延長させていただきましてもう少し他の方々からコメントをいただければと思います。一つは教科の指導と日本語の指導ということで、できれば現場の先生方でまだお話ししていない方をお願いしたいと思います。もう一つは話しことば教育ということで、インターナショナルスクールの先生もおいでになっておりますので、一言コメントをいただき、そして安さんか上谷さんのどちらかに今日の御発表についてコメントをいただければと思います。それから、もう一つ柳澤さんの御発表につきましては、共同研究者でいらっしゃいます文化庁の野山さんがいらしていますので、一言コメントをいただきたいと思いますがいかがでしょうか。どなたからでも結構かと思えます。今これが言いたいと思いついた方から手を挙げていただいてコメントをいただければと思いますが、よろしくお願ひいたします。

教科間による能力の違い

上谷 私は、午後の部でドイツ語圏オーストリアの話しことばについて発表するのですが、2点の質問をお願いします。まず1点はドイツ語圏の場合をみていますと、学習指導要領の中で、教科間のいろいろな関係が盛り込まれています。ですから、話しことばまたは「話す・聞く」ということについてもそれが「読む・書く」ということとどのように関わるのかということに関連づけていることがわかります。こういった点は日本語教育の場合にはどのように考えられているのかという点についてお聞きしたいというのが一点。それから、また数学などが例に出ておりましたので教科のことでいいますと、例えば日本でも算数・数学は得意だが国語は苦手だとか、そのような教科間による能力の違いが案外出ていると思うのですが、外国人または帰国子女についての日本語教育の場合には教科間による言語能力の差といえますか、そういったものにある程度一般的な傾向はあるのか、またはそういうのとは関係なく個人的なものなのかということ。それから、日本語教育においては数学や国語や社会などの教科間の関連は指導上どういうふうに行っているのかという点についても興味がありまして、時間がありませんでしたらお答えいただければと思います。どうもありがとうございました。

吉野 ありがとうございます。大変申し訳ないのですが、お答えをいただいていると時間がなくなってしまうかと思えますので、今、御指摘いただいたことを念頭に置きながら、午後の部あるいはお昼休みに少し話し合いをしていただければと思います。では、続きまして成田さんの方から、お願ひいたします。

二次的言語の習得の難しさ

成田 西町インターナショナルスクールの成田と申します。私は特に、大阪インターナショナルスクールの太田垣さんの御発表の中で、問題点として指摘されていたことが私ど

もの教えている子どもたちの状況にも全く当てはまるということに興味を感じました。ただ、私の教えている子どもたちというのは、第一言語が日本語の子どもたちです。では、何故インターナショナルスクールに通っているのかと申しますと、その目的や必要性は様々ですが、バイリンガルとしてお子さんを育てたいと考えられている方や、帰国子女、両親のうちのどちらかが外国人である場合などが挙げられます。学校では、ほとんどの教科の授業を英語で受けることとなりますが、毎日 45 分相当の日本語クラスでは、国語の教科書を使って日本語の学習をしています。面白いと思ったのは、第一言語であれ、第二言語であれ、そういう環境の中に置かれた子どもたちにとって、二次的ことばの習得というのは非常に難しいのだということにおいては問題点が共通しているということです。反面、少し違うなと感じられるところもあるわけで、その辺の問題をもう少し詳しくうかがってみたいなと思いました。

吉野 ありがとうございます。それではもう一方、現場の先生、山田さんあるいは秋吉さん、いかがでしょうか。一言コメントをお願いしたいと思います。

ボランティアの活用

山田 感想のようなことになるかと思いますが、お話を少しだけさせていただきます。私どもの学校には日本語学級がございます。そこで今、外国人の子どもたち 19 人ぐらいが勉強しているのですが、普段は各学年の在籍学級にいて、取り出し指導の形で日本語学級で勉強しております。実はこちらにおります花島さんですが、3 月まで私どもの学校にいました。彼は中国語が話せるものですから、中国の子どもが多い中、それまでほとんど花島さんに頼る形で、中国語がわからないことに対して何の問題も感じずにきたのですが、四月から彼がいなくなりました。すると、昨日日本にやってきましたといった子どもが学校に来た場合、まず、ことばがわからないことがこんなにも大変だったのかということは今すごく実感しているところです。先ほどボランティアの活用といったお話がございまして、これは早速、区の方と話し合ってもう少しボランティアに簡単な手続きでお手伝いいただけるようなシステムを作っていただけのように働きかけようかなと考えながら、今、話を伺わせていただきました。

それとあと一つ、勉強させていただきましたのは、日本の子どもを外国から来た子どもと一緒に学習をさせることで、日本の子どもも育ち、外国から来た子どもも日本のことばをより正しく理解し学んでいくというシステムを私どもの学校の日本語学級の形として、何とか 2 学期から取り入れていきたいと考えました。すごくいい勉強をさせていただいたな、と思ひまして今とっても嬉しい気持ちであります。どうもありがとうございました。

吉野 ありがとうございます。それでは最後になりますが、野山さんの方から一言コメントをお願いしたいと思います。

10 歳以下で来日した子どものケアを

野山 1 つは教育方法について、もう 1 つはどうしたら子どもがリラックスできるのかということについて、申し述べたいと思います。

1つ目は教育方法についてなのですが、先ほど太田垣さんのお話及び足立さん、それから柳澤さんのお話にも出ましたけれども、問題は10歳から11歳以下で来日した子どもたちに対する教育方法の開発を、とにかく早いうちに何とかいいアイデアを出し合いながら、教材の開発問題も含めて、いい方向に向けていく必要があるということです。簡単に言うと、どうするとその子どもたちが幸せな青春時代を送れるような環境をつくれるかということです。そのことを、実は、太田市の地域日本語教育推進事業（文化庁委嘱）に関わっている時に痛感しました。一例を挙げます。我々は隣りの大泉の町にも時々ヒヤリングに出かけたり、お祭りに参加させてもらったりしていたのですが、その過程で知り合った日系ブラジル人の少女（当時16歳）は、高校には行かずにアルバイト生活をしていました。日本に来た時には弁護士になりたいという大きな夢を持っていたそうですが、中学校を卒業した時点で、自分の日本語力と自分のポルトガル語力ではこの夢を果たすどころか、帰国して再適応することに対しても不安がある、という話をしみじみと僕に話してくれたことがありました。「それで、これからどうするの？」と私が聞くと、あてはないけれども、当面は、こういうアルバイト生活をしていくしかないのかなあというのです。こういう人たちが今後増産される可能性、あるいは再生産される可能性が地域には潜在しているということで、実はこういった研究会の中でそういう人たちに対応する方法や処方箋が何らかの形で提示されるといいのかなあというのが一つ。

リラックスできる環境作りを

もう一つは、そういう子どもたちも含めてですけど、教室にいる外国籍の子どもたちがどうすればリラックスできるのか、ということに関してです。私の共同研究者の舟木や梅田とも話し合っただけでなく、通常外国籍の子どもたちは「あげ・もらい」の関係でいうと、いつももらいっぱなしで、自分たちの方からあげる機会がほとんどない。つまり、何らクラスに貢献できないというシュチエーションにあり、そういう意味で不甲斐なさを感じている場合が多いようだという事です。その関係性を打破するための一つの方法として、先ほど山田さんがおっしゃったように、ポルトガル語やブラジルの文化、あるいはブラジルの生活習慣や学校の規範のようなものが学べるクラスを開設すること等が考えられます。その場では、日本人つまり日本人児童・生徒や先生及び地域の人々も時には参加して、日頃の学校のクラスとは逆で、外国語つまりポルトガル語やスペイン語での説明を聞きながら、例えば、異文化理解のためのゲームを助け合いながら共にやるなどといった交流をすることが大切かと思われまふ。そうした企画が国際理解教室や多文化理解教室のような形で開かれる雰囲気とシステム作りをしていくことがこれからはますます肝心ではないかと思ひます。お互いの国の文化や学校の規範をお互いにとっての第二言語あるいは外国語で聞くことを通して、わからない時の辛さや不甲斐なさを理解し合える教室運営が考えられていけば、日本の子どもたちも外国籍の子どもたちも、異文化に対する理解の難しさやお互いの気持ちをわかちあうことができ、それぞれの置かれている状況や気持ちが徐々にわかってくることと思ひます。

こうした教室環境の変化を経験することにより、段々とお互いの関係性が変わってきて、お互いがよりリラックスできるようになるのではないかと、このことを考えました。以上

コメント2点です。

吉野 ありがとうございます。午前中の部は「日本語教育」ということで、いろいろお話をいただきました。まだ、十分にコメントを出し尽くしていない点があるかもしれませんが、また、午後の部でもいろいろな話し合いが深められていかれると思います。最後に、突然で申し訳ありませんが、西原さんの方から一言コメントをお願いいたします。

全国の小・中学校へ向けて

西原 ありがとうございます。今までのお話を聞いて嬉しかったことがいくつかあります。一つは山田さんのお話を聞いて非常に嬉しく思いました。私はここ2週間、ここにいる石井と一緒に、武蔵嵐山の国立婦人教育会館の研修に参加いたしましたが、今伺ったようにお分かりいただけたらいいなあと思いつつ全国の小・中学校の先生方に接しておりましたので、そのことを非常に嬉しく思いました。

もう一つは、野山さんのコメントです。最近「開発教育（development education）」の研究領域に接するチャンスがあります。これは教育の南北問題について研究する新しい研究領域です。その中で、頻繁に出てくるキーワードの一つが「リラックス」ということで、これは開発教育の議論の中で繰り返し出てくるんですね。それが、子どもを幸福にするために周囲の者たちが取らなければいけない究極の態度なのかなと思いました。以上です。

吉野 ありがとうございます。それでは一先ず午前中の部はこれにて閉じさせていただきます。ありがとうございます。